

「願いの彼方」

人物

浅木 姫花 (25) (15) 会社員

永羽 すみれ (16) (26) 姫花の高校時代の先輩

河口 玲奈 (25) (15) 姫花の友人

春山 恵理 (26) (16) 姫花の高校時代の先輩

友嶋 敬史 (38) (28) 姫花の高校時代の担任

浅木 文弘 (51) 姫花の父

浅木 冬子 (50) (40) 姫花の母

永羽 百合子 (53) すみれの母

河口 理彩 (47) 玲奈の母

河口 久実 (47) 玲奈の父

河口 三津子 (74) 玲奈の祖母

少女

課長

同僚 A

同僚 B

タクシー運転手

その他

○（夢の中）泉坂高校・屋上

誰もいない屋上。外周には柵やフェンスがなくむき出し。隅に小さな祠がひっそりと立っている。

屋上で一緒に弁当を食べている制服姿の浅木姫花（15）と永羽すみれ（16）。姫花、弁当を食べながら横目ですみれを見つめる。
すみれ、上品な佇まいで姫花に笑いかける。

○マンション・外観（早朝）

○同・姫花の部屋（早朝）

暗がりのワンルームの一室。ミニテーブルの上には夕飯を食べたコンビニ弁当の残骸と空きビール缶が放置されている。カーテンの隙間から陽光が漏れている。

ベッドで寝ている浅木姫花（25）。ゆっ

くりと瞼を上げると同時に涙が一筋
零れる。

姫花「……また、この夢か」

○（フラッシュ）泉坂高校・屋上
笑いかけているすみれの姿

○元のマンション・姫花の部屋（早朝）
姫花、涙を拭いて

姫花「誰、だっけ」

タイトル「願いの彼方」

○株式会社ソフィア本社・外観（朝）
高層ビル。周りには同じようなビルが
乱立しているビジネス街の一面。夏の
日差しが照っている。

○同・オフィス（朝）
課長席の前に立ち、うなだれている姫

花。

課長、うんざりしたように

課長「浅木くん。頼むよ、送り先くらいチェックしてくれ。配送料もタダじゃないんだから」

姫花「……はい、申し訳ありません」

課長「間違えて送った分の手続きよろしくね。

今度は間違えないようにね、わかった？」

姫花「はい」

頭を下げる姫花。落ち込んだ様子で自分の席に戻ってくる。オフィスの同僚から、白い目で見られている。

○同・トイレ個室（朝）

個室に籠もり、ため息をつく姫花。外からの声。

同僚Aの声「浅木さん、またやらかしてた」

同僚Bの声「いや、あの子ミス多すぎでしょ」

姫花、ギクリとする。

同僚Aの声「もう三年目だっけ。あの子の同

期、みんな辞めてるよね。根性だけはあるのかな」

同僚Bの声「鈍感なだけでしょ。自分が無能なのに気付いてないんだよ」

意地悪い笑い声が遠くなっていく。

姫花「……そうだったら、よかったな」

メール受信音。

姫花、スマホを取り出して画面を見る。

姫花「え？」

○同・受付（朝）

エレベーターから出てくる姫花。受付のところには河口玲奈（25）が立っている。

姫花「玲奈？」

玲奈「姫花！ 久しぶりっ」

姫花「ええ？ どうして？」

姫花、歓喜と混乱の表情。

姫花と玲奈、手を合わせる。

玲奈「用事があったてさ、地元から上京してき

たの

姫花「連絡してよお」

玲奈「サプライズにしたかったからさ。つかごめん、仕事中に」

姫花「いいよ、トイレでサボってたし」

玲奈「ほほう、トイレで」

姫花「なに？」

玲奈「いいや。あんた昔から落ち込むとトイレ籠もってたなあと思って」

姫花、苦笑する。

玲奈「変わってないなー。ねえ昼休みランチしようよ。時間までブラブラしてるから連絡して」

玲奈、有無を言わず手を振ってビルから出て行く。

姫花、玲奈の後ろ姿を見つめて

姫花「強引なところ、玲奈も変わってないよ」

微笑む、姫花。

○カフェ・外観

お洒落な外観のカフェ。

○同・店内

テラス席で向かい合って座ってる姫花と玲奈。互いにコーヒーを飲んでいる。

玲奈「いやー、東京のランチはすごいわ。何がって、値段高い」

姫花「ははっ、確かに。私も上京したときはびっくりしなあ」

玲奈「びっくりって言ったら、あのドジでのろまな姫花が天下の化粧品メーカー、ソフィアに就職したことよ。世の中わからんわ」

姫花「その通りだから言い返せん」

玲奈「どう？ 仕事は」

姫花「けっこうハードだよ。辞める人多くて中途入社の人ばかりだし。社員同士もあんまり仲良しじゃないんだよね」

玲奈「ふーん。それで今日は失敗したんだ」

姫花「……今日も、ね」

しよんぼりする姫花。

玲奈「もうやめちゃえば？ 合う合わないってあるでしょ、そういうの」

姫花「やめた同期にもそれ言われたけど、自分で決めた会社だから」

玲奈、嬉しそうに笑う。

玲奈「変わんないねーほんと」

姫花「ドジでのろまなところ？」

玲奈「すぐに逃げないところ」

姫花「…鈍感なだけだよ」

苦笑する姫花。

姫花「そういえば、今朝変な夢見ちゃってさ」

玲奈「ほう、どんな？」

玲奈、コーヒーの匂いを嗅ぎながらカップに口をつける。

姫花「いつも同じ人と一緒にいる夢」

玲奈、コーヒーカップを飲む手を止める。

玲奈「…へえ」

姫花「昨日は知らない屋上で、多分学校だと

思うんだけど女の人と話してるの。でもその人の声は聞こえなくて……たまに見るんだ」

玲奈、コーヒークップを置いて、真剣な表情で姫花を見る。

玲奈「ずっとって、いつから？」

姫花「相当前からだよ。ほら私、昔交通事故遭ったでしょ。死にかけたやつ」

玲奈「うん」

姫花「あれくらいからかな。辛いなあ、疲れたなあと思うときに必ず見るの。夢の中で会うその人といるとすごく安心できて、でも最後は泣いちゃうんだ。しかもその人が着てる制服が泉高のセーラー服なんだよ。

玲奈の母校の。不思議でしょ」

玲奈「姫花の母校でもあるじゃん」

姫花「私は違うよ。二、三日くらいしか通ってないもん。入学して早々事故って自主退学とか漫画だよ、いま思えば」

玲奈「……半年、意識なかったんだもんね」

姫花「それ、未だに実感ないんだよなあ」

玲奈、苦笑する。

玲奈「その夢の主は未来のお嫁さんだったりするんじゃない？」

姫花「いやいや、お嫁さんの座は譲りたくないから。私だっていつかはね」

玲奈「まあ私はそのお嫁さんになったわけだがな」

姫花「またまた」

玲奈「いやホントに。今日も旦那の出張についてきたのよ、向こうの実家がこっちだからたまには顔出さないってね」

沈黙する姫花と玲奈

玲奈、自然な動きで左手薬指の指輪を見せつける。

姫花、絶句して

玲奈「去年の暮れに式挙げたのだ」

姫花「……呼ばれて、ないんだけど」

玲奈「来て欲しかったんだけどさー。その、身内だけでって感じだったから」

姫花「それでも教えてくれてもいいじゃない」

玲奈「私も伝えたかったんだよ。でも……まあ、そのいろいろとね。今日はその報告も兼ねてって感じ。ごめんね」

姫花「なによもー。そっかあ、玲奈が結婚か。

そうだよねえ、そのくらいの年齢だよね。

私たち。おめでとう、幸せになってね」

玲奈「ありがと」

玲奈、逡巡しながら

玲奈「ねえ姫花」

姫花「ん？」

玲奈「姫花はさ、いま」

玲奈、言いかけるもやめる。

姫花、首をかしげる。

玲奈「姫花。仕事休みとってさ、一度地元帰ってこない？　もう何年も帰ってないでしょ」

姫花「まあ有給たまってるから休みはとれるけど。私、いてもいなくてもいい存在だし」

玲奈「自虐すごいな。うん、じゃあ有給使え」

姫花「でも、ね……」

玲奈「実家には帰りたくないか」

姫花「……」

玲奈「たまに姫花のお母さんみかけて話すことあるけど、全然変わってないよ」

姫花「あの人は死ぬまであのまんまだと思う」

玲奈「距離おきたい理由はわかるんだけど、一回帰って来てよ。見せたいものあるんだ」

姫花「結婚の自慢ならお腹いっぱいです」

玲奈「そんなんじゃないよ。きっと姫花が喜ぶものだよ」

姫花、逡巡して

姫花「……ごめん、また連絡していい？」

玲奈「もちろん」

○道

歩道を歩いている姫花と玲奈。

玲奈「いやー美味しかった。しかし、なんか東京ってごちゃごちゃしてるよね。空気が重いつていうか。ああごめん、良いところ

もあるよ、やっぱりお洒落だし、夢があるよね」

姫花「どっちもわかる。でも私はあんまり感じなくなっちゃったな。私が、変わったんだよね」

玲奈「変わらないよ、姫花は。だって同じ夢見るんでしょ」

姫花「それ関係ある？」

玲奈「あるよ。嫉妬しちゃうくらいに」

玲奈、早足で歩き、姫花に振り返る。

玲奈「待ってるからね、姫花。ちゃんと帰ってきてよ。きっと、すみれ先輩もそれを望んでる」

姫花「すみれ、先輩？」

○（フラッシュ）泉坂高校・屋上
屋上で話している姫花とすみれ。

○元の道

姫花、困惑しながら

姫花「……永羽、すみれ」

玲奈「覚えてるじゃん」

姫花「玲奈、これって」

玲奈「待ってるからねー」

玲奈、手を振って走り去って行く。

呆然と立ち尽くす姫花。

○同・姫花の部屋（夜）

クローゼットの中を漁っている姫花。

段ボール箱を取り出してその中を物色し始める。

姫花「あった」

取り出したのは中学の卒業アルバムや写真が入ったアルバム。ペラペラと中身を見て、出てきた中学時代の姫花と玲奈のツーショット写真を見つめる。

○（回想）泉坂高校・屋上

青空の下、地面に隣り合って座っている制服姿の姫花とすみれ。

すみれ「姫花ちゃんには、願いごとってある？」

姫花「願いごと、ですか？」

すみれ「そう。何をしてても叶えたい願い」

姫花、思案して

姫花「すぐに思い浮かぶのは、嫌な願いばかりです」

すみれ「お母さんのことね」

姫花、気まずそうに笑う。

姫花「先輩はあるんですか。お願いごと」

すみれ「あるよ。私はそのためここに来たんだから」

姫花「ここ？」

すみれ「姫花ちゃん、私はねー」

すみれは続きを話し続けているが声が聞こえなくなる。

○元のマンション・姫花の部屋（夜）

姫花、襲ってきた頭痛に顔をしかめ、脱力するように仰向けに寝転がる。

姫花「すみれ先輩。どうして、忘れてたんだ

ろ」

姫花、天井を見つめて

姫花「……行くか」

勢いよく身体を起こして立ち上がる
うとするもバランスを崩して転ぶ。

○仙台駅・全景

人が行き交っている。

○同・バスロータリー

高速バスが出入りしているバスロータ
リー。

やってきた大型バスから降りてくる
姫花。強い日差しに目をくらませる。

ロータリーの隅にいる玲奈が手を振っ
ている。

姫花、玲奈に駆け寄る。

玲奈「何年ぶり？」

姫花「成人式の時以来だから、六年。もう
帰らないつもりだったんだけど」

玲奈「あの時、おばさんに散々言われて泣いてたもんね」

苦笑する姫花。

玲奈「実家は どうする？」

姫花「帰るよ。バレたときのあとが怖いし」

玲奈「じゃあ私も挨拶行こうかな」

姫花「いいよ。わざわざ」

玲奈「行かせて。むしろ行かないと私もあとが怖いや」

姫花「それは、すみれ先輩のことと関係あるの？」

玲奈「……思い出した？」

姫花「会話を少しだけ。不思議だよね、今まで全然思い出せなかったのに」

玲奈「そっか」

姫花、玲奈を真剣な目で見つめる。

玲奈、微笑んで

玲奈「わかってる。ちゃんと説明するから。とは言っても、私に出来ることはほとんどないんだけどね。まあ一応、準備しておい

たよ」

姫花「すみれ先輩と会える？」

玲奈、僅かに逡巡する。

玲奈「きつと、ね。ついてきて」

玲奈、先導して歩き出す。

姫花、玲奈を追いかける。

○走る車の中

道路を走っている車。玲奈が運転し、助手席に姫花が座っている。

玲奈「ほらあそこに見える山覚えてる？ 輪

王寺とか秋は紅葉きれいなんだよね」

姫花「覚えてる。毎年遠足で行かされたから

地元の子どもには目新しさがなくなっち

ゃった」

玲奈「そうそう。地元あるある」

姫花「そういえば玲奈、中学のとき男子とデ

ート行ってなかったっけ」

玲奈「その話はするな」

姫花「……ごめん、振られたんですけどね」

吹き出すように互いに笑う、姫花と玲奈。

姫花「それでどこに向かっているの？」

玲奈「もう着くよ」

○泉坂高校・外観

校門に入ってくる姫花と玲奈を乗せた車。車の窓越しに校舎を見つめている姫花。屋上へと目を向けている。

○同・駐車場

従業員駐車場には玲奈の車だけが止まっている。車を降りてくる姫花と玲奈。

姫花「泉坂高校か、今は夏休みだね」

玲奈「何も覚えてないの？」

姫花「うん。入学式に出たような気がするつてくらい」

玲奈「それですみれ先輩のことははっきり出てくるんだから混乱するわな」

やってくる友嶋敬史（38）。

友嶋「よー、待ってたぞ」

玲奈「休日ありがとうございます、先生」

友嶋「なんだ水くさい。俺たちの仲だろう」

玲奈、笑顔で

玲奈「キモいセクハラ」

友嶋「今のがっ？」

玲奈「姫花。私の高校三年間の担任、友嶋先生」

姫花「あ、初めまして。浅木姫花です」

友嶋、微笑んで

友嶋「久しぶりだな、浅木」

姫花「え？」

玲奈「一年のとき私と同じクラスだったから、

姫花の担任でもあったんだよ」

姫花「あ、すいません、何も覚えてなくて」

友嶋「いやいや、気にするな。あらためて、

友嶋だ」

玲奈「信じられる？ みんな毎年担任変わったのよ」

てるのに私だけ三年間同じだったのよ」

友嶋「切っても切れない関係というやつだな」

玲奈「あーキモい」

姫花、笑って

姫花「仲良いですね」

友嶋「三年間、手を焼かされたもんだ」

玲奈「すみませんね、問題児で」

姫花、二人のやりとりを見てまた微笑む。

○同・廊下

人気のない静かな廊下。

友嶋が先導し、姫花と玲奈が並んで歩いていっている。

玲奈「夏休みで良かった。見学しやすい」

友嶋「卒業して以来だっけか？」

玲奈「来るのはそうですね、全然変わってない。姫花はどう？」

姫花「んー正直、初めましてって感じかな」

友嶋「中は俺の時から何も変わってないけど
な」

玲奈「この人、卒業生なんだよ」

姫花「いいですね。母校で教師をするって」

友嶋、振り返って

友嶋「おう、天職だと思ってる」

ハツとする姫花。

○（フラッシュ）同・教室

生徒が席についているなか、教壇の前で話している友嶋敬史（28）。

友嶋「俺は教師を天職だと思ってる」

○元の泉坂高校・廊下

姫花、頭痛に顔をしかめている。

玲奈「姫花、大丈夫？」

姫花「……うん」

友嶋「ここが一年の時の教室だ、中で休もうか」

友嶋、教室に入っていく。

後続く姫花と玲奈。

○同・教室

教室内に人の姿はなく、整然と机が並んでいる。入ってくる姫花、玲奈、友嶋。

玲奈「またここも変わらんねー」

姫花、覚束ない足取りで教室を見まわしながら無意識に真ん中後ろの席までやってくる。

机の表面を撫でる姫花。

玲奈と友嶋、顔を見合わせてから

玲奈「確かに不思議だね」

姫花「え？」

玲奈「記憶って、無くなったりしないんだよ。頭の、ううん、心かな。心のどこかにずっと残っててきっかけがあればいつでも思い出せるんだ。そこ、姫花の席だったんだよ」

姫花、はっとして机を見る。

姫花「そう、なんだ」

玲奈、友嶋に目配せする。

頷く、友嶋。

玲奈「あのね、姫花……姫花はちゃんこの学校通ってたんだよ」

姫花「え？」

玲奈「ここで私と授業も受けて、お弁当も食べてた。半年くらい、だったかな」

姫花、教室を見渡して

姫花「嘘だよ、だって私は」

玲奈「……怪我して意識なかったのは一日くらいだったの。でも、眼を覚ました姫花は、何も覚えてなかった。高校で過ごした半年間全部」

愕然とする、姫花。

玲奈「無理に思い出す必要はないってことになって……それでみんなで口裏合わせたんだ」

姫花「だから、結婚式も？」

玲奈「高校の友達も何人か来たから。混乱させちゃいけないって思った。ごめん」

姫花、机を見つめて

姫花「……おかしいよ。だって、いくらなんでもそこまでして隠す必要あった？」

玲奈「それは」

言い淀む、玲奈。

姫花、玲奈を見て察した顔で

姫花「言い出したのは、お母さん？」

玲奈「……」

姫花「すみれ先輩と私、何かあったんでしょ。

お母さんにとってそれは隠したいことだったんだ。だから」

玲奈「(遮って)姫花のためでもあったんだよ。

だから、私も協力したの」

見つめ合う、姫花と玲奈。

姫花、先に目を逸らす。

玲奈「ごめん、隠してて」

姫花「……何があったの？ すみれ先輩に会いたい。あの人、いまどこにいるの？」

玲奈「それは」

友嶋、明るめの大きな声で

友嶋「永羽かー。懐かしいな。あいつさ、俺

あんまり接点なかったんだけど、見かければ名前呼んで挨拶してくれたんだ。地味に嬉しいんだよな、ああいうの」

友嶋、天井を指差して

友嶋「屋上に行ってみるか。お前らはよく屋上で会ってたぞ」

○同・屋上

フェンスのない屋上。隅にある祠の前に立っている春山恵理（26）眉間に皺を寄せた顔で祠を見つめている。

屋上の扉が開き、やってくる姫花、玲

奈、友嶋の三名。

友嶋「お、鍵開いてる」

玲奈「いやなんで鍵持ってこなかったのよ。

その言い方、確認もしてないでしょ」

友嶋「いやー鍵無くても開いちやうからさ」

玲奈「いくら田舎とはいえ、ずさん過ぎるでしょ」

振り返る恵理と顔を合わせる、姫花、

玲奈、友嶋。

恵理と玲奈、互いに敵意の目。

友嶋「おー、春山か」

恵理「……どうしてここに？」

友嶋「こっちのセリフだよ。お前今日は休み
だろ」

恵理「近くを通ったので。あと友嶋先生には
聞いていません」

玲奈「ってことは私かな。お久しぶりですね、
春山先輩。教師になったとは聞いてました
けど」

恵理「……」

恵理、姫花を見て不快に顔を歪める。

姫花、恵理を見つめ

姫花「……春山、先輩って確か」

○（フラッシュ）泉坂高校・廊下

廊下を並んで歩いているすみれと春
山恵理（16）。その様子を遠くから見
ている姫花。

○元の泉坂高校・屋上

姫花、恵理を見つめて

姫花「すみれ先輩の、親友」

恵理「嫌味にしか聞こえないわね、浅木姫花さん」

姫花「え？」

恵理「河口さん。どういう了見でこんなことしてるのかしら？」

玲奈「了見？ 姫花は卒業生ではなくても在校生だったんです。ここにくる特別な理由が必要ですか？」

玲奈、喧嘩腰で恵理を睨みつけている。

姫花、混乱する顔で友嶋に説明を求め
る。

友嶋、肩をすくめてみせる。

友嶋「春山。浅木は思い出そうとしてるんだよ。ここでの思い出をな」

恵理、怒りの声で

恵理「どうして今さら？」

玲奈「私が教えたんです。このままの状態は

良くないって思いました」

恵理「都合がいい。あの時は逃げたくせに。すみれはどう思っているでしょうね」

玲奈「逃げたのはそっちでしょ。主観的に決めつけて、何も知らなかった自分から目を逸らしたいだけじゃないですか。親友が聞いてあきれますね」

睨み合う玲奈と恵理。

姫花「……すみれ先輩に何かあったの？」

恵理、静かに激昂しながら姫花に歩み寄り、手を振り上げて平手打ちをしようとする。

友嶋、恵理の手を掴んで止める。

友嶋「俺は喧嘩するのはいいことだと思ってるが、手をあげるのはダメだ。教師としても、人としてもな」

恵理「生徒にはしませんよ」

友嶋「相手が誰かって、問題じゃないんだがなあ」

恵理、友嶋の手を振り払う。

姫花「あの……春山先輩」

恵理「気安く呼ばないで。人殺しのくせに」

姫花「え？」

玲奈「やめてくださいっ！」

恵理「事実でしょ」

玲奈「先輩にとってのですよ。本当に、あな

たは変わらないですね」

恵理「お互い様」

姫花「ねえ玲奈、どういうこと？」

言葉に詰まる玲奈。

恵理「すみれに何があったかだったわね」

玲奈「春山先輩！」

恵理「いつかは教えるんだから早いほうがいいわよ。そのために連れてきたんでしょ？」

恵理、姫花を見つめて

恵理「すみれはもういないわ。十年前に死んだの」

姫花「………え？」

恵理「本当に覚えてないの？ 浅木姫花さん」

恵理、姫花に顔を寄せて

恵理「あなたも一緒に飛び降りたじゃない。

この屋上からすみれと一緒に。でも、あなただけが生き残った」

姫花「私と、すみれ先輩が」

姫花、急激な頭痛に襲われしやがみ込む。

玲奈「姫花っ」

恵理、姫花を見下ろして

恵理「何も知らない、何も覚えてない。とんだ悲劇のお姫様ね。どれだけの人が苦しんでいるかも知らずに」

恵理、屋上を去って行く。

姫花、頭痛に苦しみながら屋上の祠に目を向ける。

祠の前にはすみれの後ろ姿の幻。

すみれ、振り返って微笑む。

すみれ「ここならきつと叶うと思ったの。私のたった一つの願い事」

姫花「すみれ、先輩」

すみれ「きつと叶えてくれる。世通神さまな

ら、きつと」

姫花「……世通、神、さま？」

姫花、頭痛に耐えられず気を失う。

祠は不気味な雰囲気を漂わせている。

○浅木家・姫花の部屋（夕）

薄暗い部屋のベッドで寝ている姫花。

姫花、目を覚まし上半身を起こして辺りを見回す。

姫花「私の、部屋か」

○（回想）泉坂高校・屋上

恵理に睨まれている姫花。

恵理「人殺し」

○元の浅木家・姫花の部屋（夕）

姫花、吐き気を催すも堪える。

姫花「……そうだ、私」

かすかに聞こえる怒号。

冬子の声「いい加減にしてちょうだい！」

姫花、力無く部屋を出て行く。

○同・リビング（夕）

ダイニングテーブルで向かい合っている玲奈と友嶋と浅木冬子（50）

冬子「記憶を取り戻したところで何になるの。

十年経ってるのよ、今さら蒸し返すなんて」

玲奈「でもおばさん。姫花はこの十年忘れてなんかいませんでした。断片的にでも覚えてたんです」

冬子「だからなに？ たった半年程度の記憶が何になるのよ。この事はあなたも納得しなくてはよね、玲奈ちゃん」

○同・廊下（夕）

リビングへ入る扉の前で中の話を聞いている姫花。

○同・リビング（夕）

話している、玲奈、友嶋、冬子の三名。

玲奈「はい、それが姫花の幸せになるためならって」

冬子「結婚式に呼ぼうとしてたのはまいったけどね」

玲奈「そうですね、姫花は一番の親友ですから。おばさんに釘を刺されなかったら声かけちゃってたと思います」

○同・廊下（夕）

暗い廊下で話を聞いている姫花。

唇を噛んで服の裾を握りしめている。

○同・リビング（夕）

友嶋、廊下にいる姫花の姿に気付く。

友嶋「……」

玲奈「でも全部間違ってたんですよ。私たちがのしたことは姫花の幸せになんかなくなっちゃった。あの子は何もわからないまま、ずっと苦しんでたんです」

冬子「幸せって。いったい何が不満なの？ あ

の子は就職して社会人として自立して
るじゃない」

玲奈「それが本当に、幸せですか」

冬子「ええ。昔から自分の意見なんて持っ
てない子だったからね。過去になんか拘ら
ずに前を向かせて正解だった。これは私
が合理的に判断した結果よ」

玲奈、拳をぐつと握りながらも笑っ
てみせる。

玲奈「……じゃあ聞きますけど。姫花は地
元の大学に進学したがつてたのに、おば
さんは勝手に東京の大学に願書出しまし
たよね。なんで一人暮らしさせてまで東
京に？」

冬子「自立させるために決まってるわ」

玲奈「いいえ、違いますね。あなたは煙
たがっただけですよ。自殺未遂を起し
た子どもなんていい噂の種ですもんね」

冬子「なんですって……」

玲奈「あなたは、姫花をさっさと東京に
放り出して世間様に忘れてほしかった。実
に合

理的ですね、姫花のためじゃない、世間の目を気にする、あなたにとっての合理的です。昔からずっと思ってたこと言わせてもらいますよ。それが親のやることなんですか？」

冬子「あなたに、私の何がわかるのよっ！」
友嶋「あーストップストップ。そのへんにしまししょう。浅木も起きたことですし」

姫花、はっとしてリビングに入ってくる。

玲奈、姫花に駆け寄って

玲奈「起きて平気なの？」

姫花「うん……大丈夫」

冬子「何年も顔を見せないと思ったら、ただ理由で帰ってきたものね、姫花」

姫花「……事故じゃ、なかったんだね」

冬子「そうよ。だからなに？　バカみたいにすぐ落ち込むんだから、リハビリにだって支障が出たでしょ」

姫花、冬子とは目を合わせずに

姫花「私は、教えてほしかった」

冬子「バカ言わないで。こっちは誹謗中傷受けて大変だったのよ。お前の娘が自殺の道連れにしたのなんのって」

姫花「……」

冬子「そんなことより、お盆休みはもう過ぎてるわよ。無断欠勤してるんじゃないでしょうね」

姫花「して、ないよ。有給たまってたから」

冬子「それで実家にも寄らずくだらないことに時間を使ってたわけか。親不孝な娘」

玲奈、怒り心頭な顔で

玲奈「は？　ちよつともう一回言ってもらえますか？」

友嶋、手を叩いて

友嶋「あーはいはい。ここらで終わりにしましょう。お母さん、姫花さんはもう大人です。記憶を取り戻そうとするのは彼女に任せたらどうですか。お母さんの仰るとおり姫花さんは自立した立派な社会人ですか

ら」

冬子「……」

玲奈「どうせ、姫花に近所ウロウロされたくないんですよ。悪い噂が立つから。姫花行こ」

玲奈、姫花の手を引っ張って出て行く。

冬子「待ちなさいっ！」

玄関の閉まる音。リビングに残される友嶋と冬子。

友嶋「いやー子どもの成長というのはいいものですねえ」

冬子「自分の子どもを持っていない人に言われたくありません」

友嶋「あはは、耳が痛い。ただ、私は一般的な親よりもたくさんの子どもに接してきています。その経験から言わせてもらいますと、自分の意見を持っていない子は一人もいません」

目を合わせる友嶋と冬子。

友嶋、柔らかい笑顔で

友嶋「言えない子は、たくさんいるんですけどね」

冬子「年長者に説教ですか」

友嶋「とんでもない。私見を申し上げたまでです。失礼しました」

友嶋、頭を下げ、リビングを出て行く。

冬子、納得のいかない表情。

○浅木家前

車の前に立っている、姫花と玲奈。

玲奈、仏頂面で腕を組んでいる。

やってくる友嶋。

友嶋「うわ、怒ってるねえ」

姫花「先生、すみませんでした。うちの母が」

友嶋「いやいや、職業柄慣れまくってるから気にすんな。可愛いもんだって」

玲奈「昔っから嫌いだったのよ。人の目ばかり気にして、姫花にやりたくないことばっかやらせてさ」

友嶋「子を思っただけの気持ちもあると思うぞ」

玲奈「限度っ、限度があるの。もう未成年でもないんだからこっちがやろうとしてること口だして来んなってーの」

友嶋「それ柔らかく言っておいたから。それより、浅木は大丈夫か？」

姫花「まだ、整理は出来てませんけど……」

玲奈、ばつが悪そうに

玲奈「本当にごめんね、隠してて。口で教えるより自然に思い出した方が負担少ないと思って先生に協力してもらったんだ。結局、あんな形になっちゃったけど。ほんと春山先輩は……どいつもこいつも」

姫花、苦笑して

姫花「謝るのは私のほうだよ。こんなこと十年ずっと黙っててくれたんだもんね……結婚式、行きたかったな」

玲奈「写真、見せる」

姫花「うん」

姫花と玲奈、寄り添う。

友嶋「ちなみに、俺はその式で一発芸した」

玲奈「あーめくるめく苦い記憶がああ」

頭を抱える玲奈。

笑う、姫花。

友嶋「で、これからどうするんだ？　もうす

ぐ日も暮れちまうが」

姫花「さすがに、家には帰れないですね」

友嶋「なんならうちに来るか？　むさい所だ

がもてなすぞ。おもてなしだ」

玲奈、軽蔑した目を友嶋に向ける。

友嶋「いや冗談、冗談だからね？　やめて、

その目。おれ君の先生だったんだよ」

姫花「仲良いですよね、ほんと」

玲奈「つーか、うちにくればいいって。最初

からそのつもりだったし」

姫花「ええそれは悪いよ、旦那さんに」

玲奈「実家の方。こういう時に備えて旦那に

も実家にも連絡してあるから」

姫花「……ありがと」

姫花、空を見上げる。

姫花「日が暮れる前に、一つお願いしていい？」

玲奈、首をかしげる。

○展望の丘墓苑（夕）

庭園のように美しく整備された広大な墓地。その中を歩いている姫花と玲奈。

姫花「友嶋先生、来たがってなかった？」

○（回想）泉坂高校・校門前

一人残され、寂しそうに手を振っている友嶋。

玲奈の声「いいの。女二人の方が話せることもあるでしょ」

○元の展望の丘墓苑（夕）

姫花、玲奈についていきながら周りを見渡して

姫花「けどすごいね。墓地っていうより庭園みたい」

玲奈「宗派とか檀家とか関係無いんだってよ。

私はいやだけどな、永遠にホテル泊まらさ

れるみたいない感じがして」

姫花「玲奈らしい」

玲奈「あつた、ここだよ」

永羽家之墓と刻まれた墓石の前に立つ姫花と玲奈。花はちゃんと生けてある。墓誌にはすみれの名前しかない。

姫花、手を合わせて目を閉じる。

玲奈、手を合わせず墓を見つめるだけ。

姫花、目を開けて。

姫花「私が自殺しようとして、先輩を巻き込んだってことになってるんだよね」

玲奈「……うん」

姫花「それで、人殺しか」

玲奈「そんなの嘘っぱちだよ。姫花が自殺なんてするわけない。唆したのは絶対すみれ先輩の方」

姫花「それで春山先輩とあんな感じなんだね」

玲奈「……お互い譲れないから。でも、悔しいけどあっちの方が多数派。すみれ先輩は生徒会長だったし、知名度あったから」

玲奈、聞きづらそうに

玲奈「その、なにか思い出した？」

姫花「全然。ただ一つだけ、先輩は願い事があつたって言ってた気がする」

玲奈「願い事？」

姫花「直接関わってるかはわからないけど、なんか気になって。当時、私何か言ってたなかつた？」

玲奈「すみれ先輩の話、姫花は避けてた感じだったから、私も聞かなかつたんだよね」

姫花「そっか。あと……そうだ、世通神さま」

玲奈「ヨツガミサマ？ あれ、それなんか聞いたことあるな」

姫花「玲奈も？ 私もなの。先輩が言ってたんだ。世通神さまなら願いを叶えてくれるって」

玲奈「それが自殺した理由と関係あるのかな」

姫花「わからない。春山先輩の言うとおりに、私が自殺しようとしたのかもしれないし」

玲奈「それはない。絶対はない」

姫花「断言出来ないって。お母さんが嫌で、私ずっと悩んでたし」

玲奈「そんなのいつからって話よ。姫花は確かにすぐにヘコむし泣くけど、逃げたりはしない。ずっと見てきた私が言うんだから絶対そう」

姫花、嬉しそうに微笑んで

姫花「……春山先輩も同じなんだよねきっと。

すみれ先輩のことを思ってる」

玲奈「あっちも幼なじみだったらしいよ。私のはあの人嫌いだけど、気持ちはわかってるつもり。多分誰よりもね」

姫花「……そうやって、私の知らないところで守ってくれてたんだ」

玲奈「大袈裟。私は私が信じることをしてるだけ」

姫花「ありがと」

玲奈「なんのお礼だか」

姫花「私、記憶ちゃんと取り戻そうと思う。

何があったのかちゃんと知りたい」

玲奈、自嘲気味に笑って

玲奈「もっと早くこうするべきだった」

姫花「そんなことない。今日まで本当にありがとう。それで、これからなんだけど」

玲奈「もちろん手伝うよ。当たり前でしょ。

むしろこっちからお願いするわ」

笑い合う、姫花と玲奈。

玲奈、墓を見つめて

玲奈「知らなきゃいけないのはすみれ先輩の自殺の理由か。その願い事っていうのがヒントだよね、きっと。あと世通神さまか」

姫花「民話とか、そんな話かな」

玲奈「図書館でも行ってみようかね。まあもう暗くなるから、明日からー」

百合子の声「あら、すみれのお友達？」

やってくる永羽百合子（53）

百合子を見て凍り付く玲奈。

姫花「あ、えっと後輩です」

百合子「そう。もう何年も経つのにありがとうね」

玲奈、姫花に小声で

玲奈「すみれ先輩のお母さん」

顔を見合わせる姫花と玲奈。

百合子、墓の前でしゃがみお参りをする。

姫花、墓に生けてある花を見つめて

姫花「毎日……来られてるんですか？」

百合子「ええ。仕事へ行く前と終わったあとに」

玲奈、姫花の手を引いて去ろうとする。

姫花、それに応じずに

姫花「あの……私、浅木姫花です」

玲奈、絶句する。

百合子、ゆっくりと振り返って無表情

で姫花を見るも、すぐに墓石へと顔を戻す。

百合子「そう、あなたが」

姫花「私、当時のことは何も覚えてなくて」

百合子「そう聞いているわ」

姫花「思い出すために、帰省しました」

百合子「……」

姫花「すみません。今さら、ですよね」

百合子「……そうね」

玲奈、帰ろうと姫花の袖を引っ張るも
応じない。

姫花「私が先輩を巻き込んだのかもしれない。でも、先輩には願い事がありました。それが関係している気がするんです。何か知りませんか？先輩はきつと」

百合子「(遮って)やめてちょうだい。もういいのよ」

姫花「え？」

百合子「昔の話はもういい。どうやってもあの子は帰ってこないでしょ」

姫花「それは……」

百合子、立ち上がり

百合子「あの子に何か理由があったとしても、後悔するだけだから。どうしてわかってあげられなかったのかって」

姫花「でも、それでも」

百合子「ごめんなさいね。もう十年経ってるわ。あなたも自分の人生を生きなさい」

百合子、会釈をして去って行く。

姫花、百合子の背中に向けて

姫花「私は、知りたいです。大切な人が何を想っていたのか。先輩は、お母さんのこと——」

姫花、頭痛に顔をしかめる。

百合子、振り返って笑う。

百合子「すみれが好きそうな子ね、あなたは」

姫花「……え？」

玲奈「あの、すみません。世通神さまってご存じないですか？」

百合子「世通神さま……懐かしいわね。町に伝わる古い神さまよ。あなたたちの世代は知らないかもしれない。私も、すみれには教えたことはなかったから」

百合子、頭を下げ去っていく。

背中を見つめる、姫花と玲奈。

○走る車内（夜）

夜道を運転している玲奈と助手席に乗っている姫花。

姫花、落ち込むように俯いている。

玲奈、姫花を横目で見て

玲奈「知ろうとしないっていうのは、あの人の処世術なんだよ、多分」

姫花「……どんな十年だったのかな」

玲奈、ため息をつく。

玲奈「それは置いておいて。こっちは肝が潰れるかと思っただわ。関係者はみんな姫花がすみれ先輩を巻き込んだって思ってるの。

遺族に名乗るのはリスクー過ぎるって」

姫花「ごめん、あそこで何も言わないのは卑

怯な気がして」

玲奈「クソ真面目なんだから。でもおかげでいい情報が入った、うちにばあちゃんいるから絶対知ってるよ」

姫花「世通神さま、か」

姫花、流れる景色を見つめている。

○河口家前（夜）

路駐した車から出てくる姫花と玲奈。

姫花「あれ、リフォームした？」

玲奈「うん、五年前」

姫花「やっぱり。十年は長いね」

玲奈「いくらでも取り返せるわよ。ほら行こ」

玲奈、姫花の背中を押して外門に入っ
ていく。

○河口家・玄関（夜）

入ってくる姫花と玲奈。

玲奈「ただいまあ」

どたどたと走ってくる河口理彩（47）

と河口久実（47）

理彩「おかえりい！ 玲奈ちゃん」

河口「おかえり！ わが娘！」

玲奈、冷めた声で

玲奈「ああ、うん」

理彩「あらー、姫花ちゃん久しぶり。もう美

人になっちゃって」

姫花「お久しぶりです。今日はお世話になります」

河口「いやあ、こんなに美人だと周りの男は放っておかないんじゃないかな」

理彩「もうお父さんだったら、セ・ク・ハ・ラ」

河口「おっとこりゃ失礼」

大声で笑う理彩と河口。

苦笑する、姫花

玲奈、淡泊な態度で靴を脱ぎながら

玲奈「ばあちゃん、部屋？」

理彩「うん、顔見せてあげて」

姫花、玲奈に促され家に上がる。

理彩「ごちそう作ってるからねえ」

河口「今日はとっておきのお酒が飲みたいね」

理彩「私も飲んじゃおうかしら」

姫花と玲奈、構わずに階段を家の中を
進んでいく。

○同・廊下（夜）

歩いてくる、姫花と玲奈。

姫花「相変わらず、パンチ効いてるよねえ玲奈パパとママ。地元に戻ってきたって感じする」

玲奈「私が結婚してからは拍車がかかっててね。たまに帰るとテンション高いんだわ」
玲奈、扉の前で止まりノックする。

玲奈「ばあちゃん。玲奈」
三津子の声「はいはい、どうぞ」

○同・三津子の部屋（夜）

六畳ほどの和室。中央のちゃぶ台の前に座ってお茶を飲んでいる河口三津子（74）。

三津子「おやおや、久しぶりだね、姫花ちゃん」

姫花「ご無沙汰してます」

玲奈「ばあちゃん、腰、大丈夫なの。グキツってやったって電話で言ってなかった？」

三津子「一晩で治ったよ」

玲奈「すつげえ身体だね」

玲奈と姫花、三津子の向かいに座る。

三津子「どれ、饅頭でも食べなさいな」

三津子、引き出しから饅頭を出して姫

花と玲奈の前に出す。

玲奈「ばあちゃん、もうご飯だから。そうなるから和菓子はキッチンの戸棚って決めてるんでしょ。まったくすねて」

三津子「食べたくなるからねえ、無性に」

玲奈「元気なわけだよ」

姫花、笑みを浮かべながら

姫花「あのおばあちゃん。世通神さまって知ってますか？」

三津子「おや、懐かしいね」

玲奈「やっぱ知ってるんだ」

三津子「私が子どもの頃はよくばあさんに怖がらされたもんだよ。怠けていると世通神さまに魂取られるぞってね」

玲奈「あ、それ私言われたことある。ばあちゃんからだったでしょ」

三津子「姫花ちゃんにも言ったことあったね」

姫花「怖い神様なんですか？」

三津子「いんや、そんなことないさ。古くから伝わる昔話だね。この地域にあった本当の話だ」

姫花「教えてもらえますか」

三津子、お茶を一口飲んで

三津子「世通神さまは元々、幼い女の子の霊だったんだ。病で早くに亡くなってね、それは可愛い子だったそうだ。けれど、周りから期待されてたせいか、少女は自分の未来が潰えたことを嘆き、未来ある子どもの魂を連れていくようになってしまったんだ」

姫花、顔を険しくして聞いている。

玲奈、出された饅頭を食べている。

三津子「困った村人は、通りがかりのお坊さんに頼み、神社を祀り神様として崇めたとというのが始まりさ。皆の祈りが届き、少女は子どもの守り神になった」

玲奈「それで大人は子どもに、怠けてると魂

を取るって脅すわけか」

三津子「方便だけど、当時言われたときは怖かったねえ」

玲奈「でも神社なくない？ 世通神社とか。

まんま過ぎるか」

三津子「神社はもうないんだよ。私が小さいときに大雨の崖崩れで建物は無くなってしまったんだ」

姫花「それって、良くないですよね」

三津子「そうだね。それでその神社があった土地に作られたのが、泉坂高校さ。昔は小学校だったんだけど、子どものそばにいさせてあげようと祈りを込めたんだ」

玲奈「……マジか。つながってるじゃん」

姫花「ねえおばあちゃん。その世通神さまって願いを叶えてくれる神様だったりしますか？」

三津子「願い、はて私は聞いたことないね」

玲奈「図書館に行けば資料とかあるかな」

三津子「図書館より高校の書庫の方が蔵書は

多いさ。敷地内に倉のような建物がなかったかい」

玲奈、姫花に

玲奈「そんなのあったっけ？」

姫花「いや私に聞かれても。覚えてないから」
三津子「知りたいなら行ってみるといい。今の子どもたちに知ってもらうのは世通神さまもきつと喜ぶ」

玲奈「全然、子どもじゃないけどね、私ら」

そこへノックせずにやってくる理彩と

河口。

理彩「さあデイナーの時間よ！」

河口「待たせたな」

玲奈「あーうるさいのがきた」

河口、姫花の手を引いて

河口「さあ姫花ちゃん。エスコートしますよ」

姫花「え？ え？」

姫花、為されるままに連れてかれる。

理彩「さあお母さん。ご馳走ですよ」

三津子「うれしいね」

理彩「玲奈ちゃんも早く早く」

出て行く、理彩と三津子。

玲奈、ため息をつきながら後に続く。

○同・玲奈の部屋（夜）

パジャマ姿の姫花と玲奈。ベッドに姫花、床の敷き布団に玲奈が。それぞれ寝ている。

玲奈、スマホを操作し終えて

玲奈「よし。明日、友嶋も学校来てくれるってさ。倉にも案内してくれるって」

姫花「なんか悪いね」

玲奈「しかし、明日は春山先輩の出勤日」

姫花、渋い顔。

玲奈「大丈夫よ。私がいくらでも言い返してあげるから」

姫花「ありがと」

玲奈「明日、朝一で行こ」

姫花「……その前にうち寄ってくれる？ 明

日はお父さん休みだと思っから顔出して

おく」

玲奈「おっけ」

姫花「……すみれ先輩は、世通神さまに願いを叶えてもらおうとして飛び降りたのかな」

玲奈「それじゃあ自分が死んじゃうじゃん。

死んだら願いも何もなくなる？」

姫花「そう、なんだよね」

玲奈、両手の人差し指を立てて見せて、
交差させる。

玲奈「先輩の自殺と先輩の願い事。この二つが繋がる要素といえば？」

姫花「……願いが叶わなかったから」

玲奈「だよね。先輩は世通神様に願いを叶えて貰おうとして、それが叶わずに絶望して自殺を図った。仮説だけど、一応筋は通る」

姫花「でも」

玲奈「そう。世通神さまが本当に願いを叶える神様なのかは要確認しなきゃだけど、どちらにせよ、高校生が神頼みするって部分

が怪しすぎる」

姫花「違和感はあるね、非現実的だし」

玲奈「ましてや容姿端麗、頭脳明晰の永羽すみれがよ。春山先輩が否定したがるのも無理はない」

姫花「私に当てはめたほうがしつくりくるか」

玲奈「私はそうは思わないけど、まあ姫花を知らない人からすればそうかもしれないね」

姫花「すみれ先輩だとしたら、それだけ追い詰められてたつてことだね。全然思いつけない、なんでこんなに綺麗に忘れられるんだろう」

玲奈、言い淀みながら

玲奈「……ねえ姫花。どう転ぶにしてもだよ。結果が自殺だつてことは変わらない。もしかしたら姫花が忘れちゃったのは、姫花にとつて辛いことだったからかもしれない。後味は良くないよ、きつと」

姫花「ありがと。でも覚悟はしてるから」

玲奈「……そっか。じゃあ明日に備えて、もう寝よ」

玲奈、電気を消して、姫花の布団に入り込む。

姫花「なになに」

玲奈「よいではないか、よいではないか」

二人してベッドに入り込む姫花と玲奈。

姫花「さすがに狭い」

玲奈「いいじゃん。昔はこうしてよく寝たでしょ」

玲奈、姫花に抱きつくようにして。

姫花「ねえ、私が旦那役？」

玲奈「よいではないか」

姫花「相手いるくせに」

姫花、天井を見つめて

姫花「……春山先輩とすみれ先輩もこうやって一緒に寝たりしたのかな」

玲奈、寝息を立てている。

姫花「寝るのはや」

姫花、微笑みゆっくりと目を閉じる。

○（夢の中）長屋

江戸時代の家屋。狭い居間の中央に敷かれた布団の中で眠る少女。その少女を囲んで大人たちが泣いている。その様子を離れたところで見ている姫花。

姫花「これって」

泣いている大人たちの近くに少女が立っていることに気付く姫花。

その少女は布団で眠る少女と同一人物。

少女「ごめんなさい。ごめんなさい」

悲しそうに大人たちを見ている少女。

少女が顔を上げ、姫花と目が合う。

見つめ合う、姫花と少女。

○元の河口家・玲奈の部屋（朝）

眼を覚ます姫花。

玲奈はベッドから落ちているがそのまま

ま寝続けている。

姫花「……世通神、さま？」

○浅木家前（朝）

車がやってきて止まる。

車から出てくる姫花。

玲奈、車の中から

玲奈「一緒に行かなくて平気？　待っててもいいよ」

姫花「大丈夫。先に学校行って。先生待たせるのも悪いから」

玲奈「気なんか遣わなくていいってあんなの。迎え行くから連絡して」

発進する車。

姫花、車を見送ってから自宅へと向かう。

○浅木家・玄関（朝）

おそるおそる入ってくる姫花。

姫花「ただいまあー……」

誰も返事がない。

姫花、家に上がる。

○同・廊下（朝）

階段を上ってくる姫花。扉の前で足を止めてノックする。

浅木の声「どうぞ」

姫花、扉を開ける。

○同・書斎（朝）

壁一面、本棚で敷き詰められた室内はデスクと二人がけのソファーしかない。デスクの前で物書きをしている浅木文弘（51）の後ろ姿。

浅木、振り返って

浅木「おかえり、姫花」

姫花「……ただいま」

浅木、椅子を回転させて姫花に向き合う。

ソファーに座る姫花。

姫花「お母さんは？」

浅木「町内会の集まりに出てるよ。帰るのは昼過ぎだろう」

ほっとする姫花。

浅木「少し痩せたか」

姫花「どうだろ」

浅木「仕事は大変か」

姫花「まあね。要領悪いから、私」

沈黙する、一同。

浅木「母さんから聞いたよ。帰って来た理由」

姫花「……うん」

浅木「すまなかった。黙っていて」

姫花、苦笑して

姫花「少し、ショックだったかな」

浅木「言い訳にしかないが、お前のためになると思つてのことだった。これは誓つて、嘘ではない」

姫花「お父さんは、でしょ」

浅木「母さんも同じさ。ここに居続けることで、思い出すきっかけをつくりたくなかつたんだよ」

姫花「そうだと、いいけど」

姫花、俯きながら

姫花「……昨日、人殺しって言われたんだ。
私、ほんと要領悪いからさ、陰口とか慣れ
てるんだけど、あんなに面と向かって言わ
れたのは初めてだった」

○（フラッシュ）泉坂高校・屋上

姫花を睨みつける、恵理。

○元の浅木家・書斎

話している、姫花と浅木。

姫花、自分の胸に手を当てて

姫花「ナイフで、刺されたみたいだった。お
父さんたちが私を守ってくれたんだって
ことはわかってる。でも、それだけ人の事
を傷つけておいて、自分は全部忘れてたっ
てことが、どうしても……」

浅木「許せないか」

姫花、苦笑して

姫花「だったら良かったんだけどね。そう思
えるほど、私は強くないの。ただ怖いって

思ったんだ。身がすぐむくくらいに怖い。情けないよね」

浅木「姫花が責任を感じることはない。本来ならば、私たち親が道を示さなければならぬことだった。私も母さんも、そこから逃げてしまったんだよ」

姫花「でも忘れたのは、私が選んじやったことだと思っから」

浅木「お前は昔から、ひたすら自分の道を突き進むな」

姫花「お父さんに似たんだと思うよ」

浅木「そうかな。そうなら、悪い事をした」

静かに笑い合う一同。

姫花「飛び降りた理由はまだ思い出せない。きっと私なりの理由があつたんだと思うの。でも、私がしたことはお父さんたちにとって辛いものだったよね。ごめんなさい」

浅木「違うよ、姫花。それはすべて親の責任なんだ。子どもにその選択をさせてしまったことがね。子どもが謝ることではない。」

すまなかつた」

姫花「謝り合ってばっかりだね、私たち」

浅木「やはり、似てるのかもしれない」

笑い合う、一同。

姫花「それでお父さん。当時のこと教えて欲しいの。お父さんが知ってる範囲のことでいい」

浅木「……親としてはあるまじきだが、たいしたことは知らないんだよ。どちらかが唆したなんて言われていたが結局のところ、それはわからなかった。遺書もなかったしな。だが、姫花も永羽さんも合意のうえでの行為だったのだと思う。互いに脱いだ靴が屋上に並べられていたそうだからね」

姫花「……そっか」

浅木「永羽さんの名前も、そのときに初めて知ったくらいだった。本当に一人の親として恥ずかしいよ」

姫花「気にしないで。玲奈にも話してなかったくらいだし、多分、私は誰にも話してな

かったんだと思うよ」

浅木「……永羽さんのお母さんにも同じことを言われたな。彼女も何も知らなかったそうだ」

姫花「先輩のお母さんと、話したんだ」

浅木「当時、少しだけな。だがあちらは続けてご主人を亡くされていたから、酷く憔悴していたのを覚えている。心配になるくらいだった」

姫花「ご主人って、先輩のお父さんってことだよな？」

浅木「ああ、同じ夜に交通事故に遭ったそうだよ。こんな不幸な偶然があるのかと思ったよ」

姫花「同じ夜……父親？」

姫花、襲ってきた頭痛に顔をしかめる。

○（フラッシュ）泉坂高校・屋上（夜）

屋上の隅にある祠。

屋上の端に立つすみれの後ろ姿。断片

的な声。

○（フラッシュ）展望の丘墓苑

永羽家の墓の前。

墓誌にはすみれの名前しか刻まれていない。

○（回想）泉坂高校・屋上（夜）

屋上の端に立つすみれの後ろ姿。

振り返るすみれの頬に涙が流れる。

すみれ「私は、ダメな先輩だね」

○元の浅木家・書斎（朝）

我に返る姫花。息を切らしている。

介抱している浅木。

浅木「姫花、どうした。大丈夫か？」

姫花「先輩の、先輩の願いって……」

姫花、口元を押さえて

姫花「……すみれ先輩のお母さんに会わないと。お父さん、連絡先知らない？」

浅木「引っ越してなければ住所だけならわかるぞ。一度だけ、家に訪ねたことがあるからな」

姫花「お願い、すぐに連れてって」

浅木「姫花、お前、まさか」

姫花、頷く。

姫花「先輩の願いは……叶ってたんだ」

○泉坂高校・土蔵・外観

敷地内の隅にある巨大な土蔵。

○同・土蔵

吹き抜けの二階建てで古い本棚と書物が並んでいる。中央のテーブルで資料を漁っている玲奈と友嶋。テーブルには古い書物が積まれている。

玲奈「ありそうでない」

友嶋「世通神さまって、俺のガキの頃じいさ

んが言ってたよ。懐かしいなあ」

玲奈「つーか、先生手伝わなくていいよ」

友嶋「まあまあ。手伝わせろよ」

玲奈「教師って楽そうだよね」

友嶋「教師に夏休みはないんだぞ。業務は山ほどある」

玲奈「だったらいいよ。仕事しろし」

友嶋「浅木や永羽のことを知りたいと思うのは俺も一緒ってことだ」

玲奈、友嶋を一瞥して

玲奈「……世通神さまが願いごとを叶える云々の文言だからね。見逃さないでよ」

友嶋「オーライオーライ」

○同・職員室・

コーヒーカーップを片手に各種鍵が掛けられた棚を見つめている恵理。

土蔵と書かれた場所だけ鍵がない。

恵理「……」

恵理、ふと窓の外を見ると校門から姫花が小走りでやってくるのを見つめる。

恵理、ため息をついて動き出す。

○同・土蔵

本を呼んでいる、玲奈と友嶋。

玲奈、呼んでいた本を乱暴に閉じて

玲奈「ないっ」

友嶋「世通神さまのことは載ってんだけどな。

ここが元神社だったなんて知らなかったわ」

玲奈「あの屋上の祠でしょ」

友嶋「お洒落で作ったのかと思ってたなあ」

玲奈「私も」

姫花がやってくる。

姫花「ごめん、遅くなっ」

玲奈「姫花、迎え行ったのに」

姫花「お父さんに送ってもらったから」

玲奈「大丈夫だったの？」

姫花「うん、お母さんいなかったし。それで

ね、私さっきまで先輩の」

恵理の声「本当に呆れたものだわ」

振り返る、姫花。

やってくる恵理。

姫花「春山先輩……」

恵理「友嶋先生、今日はお休みでは？」

友嶋「あーおう、近くを通ったからな」

恵理、ため息をつく。

玲奈、姫花を守るように前に出て恵理と向き合う。

玲奈「何か用ですか。先生の許可は取ってここにいます。文句言われる筋合いありませんけど」

恵理、後ろ手に持っていた本を見せてつけるように

恵理「探してるのはこれでしょ」

本の表紙には墨で『世通神伝説』と書かれている。

玲奈「……それ」

恵理「イライラするのよね、本当に。私はあなたたちみたいに思いつきで動いてない。

この十年でどれだけ調べてきたと思って

るの」

恵理、本を開いて

恵理「世通神が子ども魂を奪っていくって話は知っているんでしょ」

玲奈、喧嘩腰の口調で

玲奈「知ってますよ。それでお坊さんが祀ったことで子ども守り神になったんですよ」

恵理「ええ。その結果、世通神は親を困らせる悪い子どもに使う迷信になった。でもここには世通神はただ子どもの魂を奪うだけじゃなく、魂と引き替えにその子どもの願いを叶えてくれるというものだったとも書いてある」

玲奈「魂、って命ってことですか」

恵理「そう。けどね、ここにあるのはただの創作なのよ。世通神の元になった子どもが死んだのは本当。そのあとすぐに子どもが多く死んだのも事実よ。けどそれは子どもにかかりやすい病気が流行しただけだっ

た」

友嶋「そういえば、流行病の資料はこっちにも書いてあったな」

恵理「無知は罪よね。ただの偶然が少女を悪魔にし、神にさえしてしまったのだから」

玲奈「創作だっていう根拠は？」

恵理「これを書いたのは世通神の元になった子どもの親族だってことまで調べがついてる。大方、子どもの命を奪ったとされてしまった印象を少しでも変えたかったんでしようね。偶然だったとはいえ、悪霊の人殺しにされたわけだから。でも実際、願いを叶える文言はこの本にしか書いてないし、口頭伝承もされていない。ほとんどの人が知らないのよ」

玲奈「……」

○（回想）河口家・三津子の部屋

話している、姫花、玲奈、三津子の三名。

三津子「願い、はて私は聞いたことないね」

○元の泉坂高校・土蔵

話している、姫花、玲奈、友嶋、恵理の四名。

恵理「命と引き替えにという設定にしたのは、後世で実行する人をなくすためでしょう。ご丁寧に、条件の中には願いを文字にしてはいけないなんてことも書いてある。まあ実際に亡くなった子どもは病死だし、これが書かれたのは守り神とされた後だから、実際に試した子どもなんていなかったでしょうけどね。当時を知る人がいなくなっても時系列を調べれば茶番だってことはすぐにわかる」

玲奈「他の条件ってなんですか」

恵理「社に自分の血を捧げて、願いを口にしながらその場で自害すること。願いを文字で残したり、人に話すことも許されないってね」

友嶋「確かにその本だけを読めば、世通神さまは願いを叶えてくれる神様になりそうだな」

恵理「そうですね。でもすみれはそんな愚かな子じゃありません。あの子が無根拠にこんなおとぎ話を信じるはずがない。当然、私と同じ結論に至ったはず。まあ浅木さんの場合は別でしょうけど」

恵理、姫花を睨んで

恵理「忘れているふりして、本当は全部覚えてるんじゃないの？　あなた当時は随分と母親に悩まされていた。そしてこの本を見つけて自殺する口実を見つけた。でも一人でやるのは怖いから、すみれの優しさにつけ込んで巻き込んだ。違う？」

玲奈「そっくりそのまま返しますよ。姫花はすみれ先輩が何かを願っていたってことを聞いています」

恵理、鼻で笑って

恵理「記憶なんていくらでも歪められるわ。」

自分の都合がいいようにね。その子の母親の毒親っぷりはいまでも覚えてる。学校に怒鳴り込んだり、近所にうちは悪くないって言い回ったり、見ているだけでストレスだった。幼なじみなら、私よりも実感があ
るんじゃないくて？」

玲奈、言葉に詰まる。

恵理、持っていた本を姫花に投げつける。
る。

恵理「何度でも言うわ。すみれはこんなおとぎ話を鵜呑みにするような子じゃない。それは私が一番よく知ってる。こんなものに惑わされて、他人を巻き込んで、すみれを殺したのはあなたよ。みんな思ってるわ。

お前が死ねばよかったのにつてっ！」

姫花「……」

恵理「理解できたなら、二度と姿を見せないで」

恵理、踵を返す。

姫花「すみれ先輩は私の憧れでした」

足を止める恵理。

姫花、足下に落ちた本を拾って。

姫花「きれいで、頭も良くて、嫉妬するのなんて忘れるくらい完璧な人で、こんな風になれたらなって何度も思った」

恵理、振り返って姫花を睨む。

姫花、本に視線を落としながら

姫花「救いたかった。でもあのときの私は何も出来なくて、ただあの人に寄り添うことしかできなかった。全部知っていたのは、私だけだったのに」

姫花、恵理を見つめて

姫花「先輩の言うとおり、すみれ先輩を殺したのは私です。だから私はここに来たんだと思います。導かれた、というべきかもしれません」

恵理「……何を言ってるの？」

姫花「薄々、気付いているんじゃないですか。」

世通神さまの力は本物だってこと」

恵理、拳を握りしめる。

姫花「すみれ先輩には叶えたい願いがあった。

そしてそれはもう」

恵理「やめてっ！」

沈黙する一同。

友嶋「浅木。お前、記憶が」

姫花「十月二十日の夜、私とすみれ先輩は屋上から飛び降りました。時間は……八時過ぎだったと思います。そのほとんど同時刻に、すみれ先輩のお父さんが亡くなっているんです。交通事故でした」

恵理「……」

姫花「正確には、本当のお父さんじゃありません。お母さんの再婚相手です。先輩はずっと暴力を振るわれていた……性的なものもありました」

玲奈「じゃあ……先輩の願って」

姫花、首を振って

姫花「私は先輩の願いを聞いてなかった。条件には人に話しちゃいけないってあったから。でも、今ならわかる。先輩の願いは

お母さんを救うことだった。暴力はお母さんの方が酷かったの。その願いのかたちが交通事故だっただけ」

玲奈「それじゃあお母さん、勘違いしてるよね。先輩が飛び降りた理由」

姫花「うん、会って伝えてきたよ」

○（回想）喫茶店

テーブルを挟み、話している姫花と百合子。

百合子、姫花の話を聞いて顔を伏せて泣き始める。

○元の土蔵

話している、姫花、玲奈、友嶋、恵理の四名。

姫花「春山先輩なら、亡くなったお父さんのことも調べがってますよね」

恵理「……ただの、偶然よ」

姫花「先輩の言うとおり、すみれ先輩はちや

んと調べてたと思います。世通神さまが本
当に願いを叶えてくれるかどうか。でも、
すがりたかつたんです。それだけ、あの人
は追い詰められてた」

恵理「そんなことあるわけないっ！ すみれ
はいつも笑ってて、辛いことがあったなら
私に話してたはずよ。あなたじゃなく、私
に！ 神様なんかよりも、私を頼ったはず
よ……」

姫花、泣きそうな顔で

姫花「一度、聞いたことがあります。どう
して私に身の上を話すのかって。一番仲の
良い春山先輩には話さないのかって。そし
たら、すみれ先輩はこう言いました。あの
子が、一番の親友だからだって」
恵理、唇を噛んでいる。

○（イメージ）泉坂高校・図書室

隣り合う椅子に座って本を読んでいる、
すみれと恵理。

姫花の声「曲がったことが許せなくて、誰よりも人思いのあの子に話したら、きっと私以上に悩んでしまうから、私と会う度に心配させちゃうから」

すみれと恵理、たまに目が合い、微笑み合う。

姫花の声「いつでも一緒にいて笑っていたいからって」

○元の土蔵

恵理、拳を握りしめながら涙を流す。

姫花「先輩、先輩が何も知らないことが、すみれ先輩にとっての救いになっていたんですよ。これはわかってあげてください」

恵理「それでも、それでも私は……」

恵理、崩れるように両膝をついて。

恵理「話してほしかった」

玲奈、恵理を悲しげな顔で見つめる。

姫花、恵理の脇を通って土蔵の出口に向かう。

玲奈「姫花？　どこ行くの？」

姫花「ちよっと歩いてくる、ごめん」

姫花、土蔵を出て行く。

沈黙する一同。

友嶋「難しいな……人間同士っていうのは」

玲奈「噛み合わない、ですよね」

友嶋「それでも噛み合わせようとし続けるのが、愛情なんだろうな」

玲奈「くさい」

友嶋「えー、良いこと言わなかった俺」

玲奈、恵理に近づいて

玲奈「先輩……先輩の気持ち、私ちよつとはわかりますよ。あとすみれ先輩の気持ちも。

親友ならなんでも言っただけほしいけど、親友だからこそ言えないってこともあります」

恵理、涙を拭って

恵理「……十年間、黙っているっていうのは

辛かったでしょうね」

玲奈「まあ、それなりに」

恵理「わかってたの。最初から私に誰かを責

める資格なんてなかったって。私はすみれが苦しんでることに少しも気付いていなかったんだから。あなたに言われた通り、私は現実から目を逸らしてた。みっともない話ね」

苦笑し合う玲奈と恵理。

友嶋、安心したように息を吐き出す。

友嶋「うーん。しかし、同じタイピングで交
通事故ってなると……ちよつと怖い偶然
だよな」

玲奈「神がかり過ぎ……まあ本物だったとも
いえなくはないですけど」

恵理「証明しようがないわ。記録上ではこの
学校での自殺者はすみれだけだった。自分
が死んでまで何かを願う、ましてやそれを
実行するなんて、そう出来ることじゃない。
あの本の作者もそう考えて書いたんでし
ょうね。いくらすみれでも……それは」

玲奈、険しい顔で

玲奈「……先生、屋上の鍵って開いてるんで

したよね」

友嶋「ああ。壊れてるから力入れれば開いちやう」

玲奈「姫花。世通神さまの力は本物だって言い切っていました」

恵理「あの子の立場ならそう思って当然でしょう」

顔を合わせる一同。

恵理「やりかねないわ」

玲奈「バカ姫花」

友嶋「いくぞ、屋上だ」

一斉に土蔵で出て行く一同。

○同・屋上

屋上につながる扉が内側から開こうとしているが鍵が掛かっている。強引に引き戸が開かれ姫花がやってくる。屋上の隅にある祠の前に立つ姫花。手には『世通神伝説』の本。

姫花、祠を見つめながらポケットから

カッターナイフを取り出し、掌を切る。
流れる血を祠の中にある小さな器に
垂らす。

姫花「……」

○（回想）屋上（夕）

祠の前に立っている、姫花とすみれ。
すみれの手には『世通神伝説』の本が
ある。

すみれ「中に小さな器があるでしょ。ここに
自分の血を入れて命を捧げるの。そうすれ
ば」

姫花「願いが叶う、ですか」
頷く、すみれ。

姫花「本当に、やるんですか」
すみれ「……私がこの学校に入学したのは、
運命だったのよ」

姫花「でも」
すみれ「良い感じで柵もないし、飛び降りる
のが一番いいかもね。刃物は、ちよつと怖

いから」

姫花「……」

すみれ「ごめんね、姫花ちゃん。楽しくない話ばかり聞かせちゃった」

首を振る姫花。

姫花「私も、話聞いてもらいました」

すみれ「お互い、色々あるね」

すみれ、姫花の頭を撫でて

すみれ「私は暗くなるまでここに残る。今日は、一緒に帰れない」

姫花「……はい」

すみれ「一人きりだったら、私は決断出来なかったと思う。ありがとう、今日までそばにいてくれて。お母さんとはうまくやるのよ。姫花ちゃんなら大丈夫。あなたは強いから」

姫花、泣きそうになりながら

姫花「強く、ないですよ」

すみれ、微笑んで

すみれ「さあもう行って」

姫花、名残惜しそうにすみれを見つめ
屋上を去るが、扉の前でもう一度振り
返る。

すみれ、穏やかに笑って

すみれ「世通神さまならきつと、願いを叶えてくれる」

姫花、涙を流す。

すみれ「さよなら」

姫花、その場から走り去る。

○元の屋上

祠を見つめている姫花。

『世通神伝説』の本を祠の中に置いて

姫花「ねえ世通神さま。あなたは、こうなる

日を待っていたんじゃない？ 願いと魂

は一つずつだから。だからあの日、私を助

けたんでしょ」

姫花、微笑む。

姫花「神様だもんね。信じてくれた人は、助
けたいよね」

やってくる玲奈、恵理、友嶋。

玲奈「姫花！」

姫花に歩み寄る、玲奈、恵理、友嶋。

恵理、姫花の掌から流れる血を見て絶句する。

恵理「……あなたは」

玲奈「姫花、何してるのよっ」

姫花「玲奈。私思うんだ。これはあの日から続いている、世通神さまが示してくれた道標だったんじゃないかって」

玲奈「作り話だよっ、全部ただの偶然なの。

叶う保証なんてない。本当だったとしても、

叶ったときに姫花は」

姫花「うん、わかってる。それでも」

友嶋、姫花を見て困ったように呟く。

友嶋「……親の目を節穴だな」

恵理「本当に、敵わないわね」

恵理、姫花に歩み寄って

恵理「何度も思ったわ。すみれの願いが叶ったのなら、私が命を捧げればすみれを生き

返らせることができないんじゃないかって。でも出来なかった。私はすみれに会いたかったから。ううん、それも言い訳ね。ただ死ぬのが怖かっただけ。でも浅木さん。あなたは……迷いなんてなく選んでしまうのね」

恵理、姫花の手を握って

恵理「お願いやめて。すみれはこんなこと望んでない」

姫花「……そうですね、先輩はきっと望んでいない。でもあの人は間違っていたから。十年経って、やっとそれがわかった。だから私は、伝えにいかないといけないんです」

恵理「浅木さん」

姫花「大丈夫ですよ、先輩。すみれ先輩にまた、会えますから」

恵理、姫花の瞳を見つめる。

○（回想）道

帰宅している制服姿のすみれと恵理。

恵理「最近、後輩と仲良いみたいじゃない？
浅木姫花さんだったかしら」

すみれ「名前までご存じとは。さすがは鉄の
副会長殿」

恵理「茶化さないで」

すみれ「少し話す機会があつてね。あー、こ
の子はいいなあつて思ったの。気弱そうに
見えるけど、ちゃんと芯を持ってるのよ。
そういうのってカッコイイでしょ」

恵理「芯、ね」

すみれ「恵理に似てるわ。強くてまっすぐで
愛らしい。きっと気が合うと思う。仲良く
して欲しいな」

○同・屋上

姫花の強い瞳を見て泣きそうになる恵
理。

恵理の心の声「どうしていまさら、こんなこ
とばかり思い出す」

恵理「ダメよ、浅木さん。行かせられない。

もう私がすみれのために出来るのは、これ
しかないの。だから」

姫花、微笑んで

姫花「ごめんなさい」

姫花、恵理を突くように押し倒し、屋
上の端まで走り出す。

玲奈「姫花っだめっ！」

友嶋「浅木っ！」

玲奈と友嶋が姫花を追って走り出した
直後、祠が強烈な光を発し始める。そ
の光に気を取られる玲奈、友嶋、恵理。

恵理「うそ……本当に」

友嶋「浅木、よせっ！」

迷いなく駆ける姫花。

姫花の心の声「世通神さま」

姫花を追いかける玲奈と友嶋。

姫花の心の声「あなたはすみれ先輩を救いた
かったんですよね。家族を想うあの人のこ
とを放っておけなかったから」

姫花、屋上の端までの距離が近づく。

姫花の心の声「でも、願いは魂と引き換えじゃないといけない。すみれ先輩を救う方法はこれしかなかった。だからあの日、私だけを助けた」

姫花、躊躇せずに屋上を踏み切り飛ぶ。
友嶋がすぐ後ろまできて手を伸ばすが、
姫花には届かない。

姫花の心の声「必ず助けます、だからっ」
姫花の身体が落下していくと同時に、
祠から放たれる強い光が夜空を明るく照らす。

○浅木家・姫花の部屋（夜）

部屋の中央に制服姿の姫花が立っている。ゆっくりと目を開ける姫花。

姫花「……」

姫花、辺りを見回し、自分の顔に触れる。呆然としたまま姿見に映った自分と目が合っつて姿見に手を触れる。

姫花「これって」

部屋の扉がノックなしで開かれ、浅木

冬子（40）が入ってくる。

冬子「姫花っ、夕飯だって言ってるでしょ！」

ぎよっとして冬子を見つめる姫花。

冬子「まだ着替えてないのっ？ 本当のろ

まね」

姫花、冬子を唾然とした目で見つめた

まま

姫花「……お母さん」

冬子「何よ。バカみたいな顔で」

姫花「若い」

冬子、怒り心頭で

冬子「ふざけないで！ さっさと下りてこな

いと夕飯捨てるからね」

乱暴に扉を閉める冬子。

姫花、脱力するようにベッドに腰を下

ろして

姫花「ヒステリックは相変わらずか……でも」

姫花、胸に手を当てて深呼吸する。

姫花「昔だったらもつと傷ついてた。十年は

長いつてことかな……」

姫花、机に置かれた日付と時刻が表示されたデジタル置き時計を見る。

表示は十月二十日の七時三十分。

急いで部屋を飛び出す、姫花。

○同・玄関（夜）

姫花、階段を駆け下りて靴を履く。

リビングからやってくる冬子。

冬子「姫花っ 何してるのっ！」

姫花「ごめん、出かけてくる」

冬子「ふざけるのも大概にしなさいよ」

姫花、意を決したように冬子と向き合う。

姫花「お母さん。私、ずっとお母さんから逃げてた。怖くて嫌なことでも黙っていうこと聞いてた。がっかりされるのが嫌だったから。でもそれじゃだめだったんだよね。

私はずっと逃げ続けたから玲奈との時間を失って、大事な人も救えなかった。こん

な当たり前のことに気付けたのは……世
通神さまのおかげかな」

冬子「あなた、何を」

姫花「（遮って）お母さん」

姫花、冬子の目をまっすぐ見つめて

姫花「今日から私、反抗期だから」

姫花、家を飛び出す。

冬子、閉まった扉を見つめて啞然とし
ている。

○道（夜）

夜道を走っている姫花。

姫花「すみれ先輩……」

焦りを滲ませながら走る姫花。

○泉坂高校・屋上（夜）

誰もいない屋上で一人、祠の前で立っ
ているすみれ。

すみれ「お願い、世通神さま」

○同・敷地内（夜）

校門から息を切らしながら走ってくる
姫花。校舎内に灯りはついておらず無
人。すぐそばの職員玄関の扉を開けよ
うとするも鍵が掛かっている。

姫花「もう、前はどうかやって入ったんだっけ」
姫花、焦りながら辺りを見回してそば
に落ちている大きめの石を見つける。

○同・屋上（夜）

すみれ、靴を脱いで屋上の端ギリギリ
に立って夜空を見上げている。
空には満月が輝いている。

すみれ「……綺麗」
やってくる姫花。

姫花「すみれ先輩っ！」

すみれ、ゆっくりと振り返る。

すみれ「……やっぱ来ちゃったのね、姫花
ちゃん」

姫花、すみれの姿を見て涙がこみ上げ

て来る。

姫花の心の声「すみれ先輩が、生きてる」

姫花「先輩」

すみれ「私は、ダメな先輩だね。どこかで姫花ちゃんが来てくれるって望んだ。もしかしたら……一緒について」

姫花の心の声「あの日は、先輩を止めるためにここにきた。死なないでって。一緒に生きてって伝えるために。けど」

すみれ、涙を流す。

すみれの涙を見つめる姫花。

○（回想）泉坂高校・屋上

ふたりきりで話している姫花とすみれ。

穏やかな表情で話すすみれの話。姫

花が聞いている。

姫花の心の声「辛い話も悲しい話も、先輩はいつだって穏やかに話をしていた。傷ついているはずなのに、傷ついた自分を見せることは一度もなかった」

○元の泉坂高校・屋上（夜）

屋上の端に立っているすみれと向き合っている姫花。

姫花の心の声「この人の涙を見たのは初めてだった。だから……だからだから、私は」

姫花「……先輩。私、後悔してます。憧れの人と仲良くなつて、浮かれてたんですね。本当の意味であなたに寄り添えていなかった。強い人なんだって決めつけてたんです。たった一歳しか変わらないだけの女の子なのに。傷ついていないわけなかった。私はそれを今日この日に思い知って、少しでもあなたのそばについて」

すみれ「……姫花ちゃん？」

姫花「でも、世通神さまがチャンスをくれました。ううん、違います。これは最初から、あなたを救うための物語だった」

すみれ「姫花ちゃん、何を言ってるの？」

姫花、すみれに歩み寄って。

姫花の心の声「いまなら言える。怖くて仕方

なかった未来が、少しだけ見えているから」

姫花「先輩、生きてください」

すみれ「姫花ちゃん……」

姫花「辛いことばかりだと思います。でも、間違っているんです」

すみれ「……」

姫花「方法は、いくらでもあります。先輩を助けてくれる人はたくさんいます。だから」

すみれ、悲しそうに微笑んで

すみれ「まるで、別の人と話してるみたいね」

姫花「少しだけ、大人になったからかもしれ
ません」

すみれ「大人に？」

姫花「はい、あなたのいない未来で」

すみれ、首を傾げる。

姫花「その未来では、先輩のお母さんは幸せにはなりません。ひとりぼっちで暮らし続けて朝と夜、先輩に会いに行く毎日です。自分を責めながら」

すみれ「……」

姫花「春山先輩はずっとずっと先輩のことを探し続けちゃいます。友嶋先生も、玲奈も、先輩がいなくなつたことで、先輩を知っている人はみんなどこかに傷を負うんです」

姫花、またすみれに歩み寄って

姫花「先輩」

すみれ「来ないで」

足を止める姫花。

すみれ「あり得そうな話だね、もしかしたら本当にその通りになるかもしれない」

すみれ、空を見上げる。

すみれ「でも違うんだよ、姫花ちゃん。願いはある。でも、それ以上に私が生きていたくないの。辛いんだよ、苦しいんだよ」

姫花、涙をこらえている。

すみれ「世通神さまなんてただの口実なの。願いなんて叶うわけないもの。ただ私はお母さんを見捨てて逃げたいだけの卑怯な子どもなの」

姫花「願いは、叶いますよ」

すみれ「叶うわけない」

姫花「叶います」

すみれ「……なら叶えてもらおうわ。世通神さまに、私の願いを」

すみれ、倒れるように屋上から身体を投じる。

姫花、走ってすみれの手首を掴む。

すみれ「離して……姫花ちゃん、あなたも落ちちゃう」

姫花「私には先輩の苦しみはわかってあげられない。でも」

姫花、すみれの手首を強く握る。

姫花「未来には、嫌なことがたくさんあった。

私はドジでのろまだから毎日誰かに迷惑かけてた。でも、良いことだってあったんです！ ご飯が美味しく炊けたなとか、無くしてたキーホルダーが見つかったとか、親友が、結婚して幸せになったこととか。たくさんあったんですよ。たった十何年し

か生きてないくせにつ、今が最低だって決
めつけるなよ！」

姫花の手から、すみれの手がずり落ち
ていく。

姫花「一緒に生きましよう。私、なんでもし
ますから。もう二度、忘れませんから」

すみれ「……姫花ちゃん」

すみれの手がずり落ちていく。

屋上の祠が光を放つ。

姫花、その光に気がついて思い切って
すみれと一緒に屋上から落ちる。

すみれ「姫花ちゃ……」

姫花、すみれを強く抱きしめながら

姫花「世通神さまっ！先輩を助けてっ！」

地面が迫り、目を強く閉じる姫花。

○島内病院・病室

個室のベッドで目を覚ます姫花。

ベッド脇の玲奈が座っている。

玲奈「姫花っ？」

姫花「……玲、奈」

姫花、半身を起こして

姫花「あたま痛い」

玲奈、姫花に抱きついて

玲奈「あんたはもう……心配かけてさ」

姫花、自分の頭に巻かれた包帯に触れ

て

姫花「はは、そっか。そんな都合の良い話があるわけないよね」

○（フラッシュ）北白坂高校・屋上（夜）

屋上の端に立つすみれの姿。

○元の島内病院・病室

涙ぐむ姫花。

姫花「願いなんで、叶うわけないよね」

玲奈、姫花から離れて

玲奈「久々に帰ってきたと思ったなら、相当、まいったのね……嫌なことあったならまず相談するのが親友でしょ」

姫花「うん、ごめん」

玲奈「あんたのことだから、私に迷惑かかる
とか重荷になるとか思ったんだろうけど、
親友なめんな。心臓が止まりそうになった
のはこれで二度目だからね、ほんとに」

姫花「うん：：うん？」

玲奈「ん？」

顔を見合わせる姫花と玲奈。

玲奈「なに、変なこと言った？」

姫花「二度目？」

玲奈「忘れたとは言わせないわよ。高校のと
き屋上から落ちて大怪我したでしょ」

姫花「：：」

玲奈「まあ東京だからこそ悩みも多いんだろ
うけど。今度は急にぶっ倒れて何日も昏睡
するとかどんだけ働いてんのよ：：もう
っ腹が立ってきた。ねえもうこっちで就職
すればいいじゃん、辞めちやいなって」

姫花、呆然と玲奈を見つめている。

玲奈「ちよつと姫花？ 聞いている？」

姫花「あ、えっと」

玲奈「ていうか、こんな話してる場合じゃないや。先生呼んでくるから待ってて。ナー
スクール壊れてるのよ、もう田舎っ」

玲奈、病室を出て行く。

姫花、口元を押さえて

姫花「……未来が、変わった？」

病室を飛び出す姫花。

○泉坂高校・校門前

タクシーが止まり、飛び出してくる病院着の姫花。

ちようど校門のほうへやってきた友嶋。

友嶋「おお浅木。なんつー格好してるんだお前。怪我もう大丈夫なのか」

姫花「すいません、後にしてください」

友嶋に構わず、校舎内に入っていく姫花。

友嶋「なんだなんだ」

友嶋、姫花を目で追っていると後ろから肩を叩かれる。

肩を叩いたのは、タクシーの運転手。

運転手「すみません。知り合いならお支払い

お願いできますか」

友嶋「うえ？」

○同・廊下

廊下を歩いてくる恵理。階段を上がっていく姫花を見て

恵理「浅木さん？」

姫花、気付かずに階段を上っていく。

職員玄関からやってくる友嶋。

友嶋「あーまいった」

恵理「どうしました」

友嶋「いや、浅木のタクシー代払わないといけなくて、現金あったかな」

友嶋、職員室へ入っていく。

恵理、笑みを浮かべながら姫花が向かった先を見つめる。

○同・階段

息を切らしながら階段を上る姫花。

○同・屋上

鍵がかかった扉を無理矢理開けて入ってくる姫花。屋上には祠があった場所には何もなくなっている。そこには和服姿の少女が笑顔で立っている。

姫花、歩み寄って

姫花「世通神、さま……」

少女、微笑みながら姫花の後ろに指を差す。

すみれの声「あなたの言った通りだった」

後ろからの声に、はっとする姫花。

すみれの声「願いは、本当に叶うのね」

ゆっくりと振り返る、姫花。

永羽すみれ（26）が立っている。

姫花「すみれ、先輩」

すみれ「世通神さまが教えてくれた。あなた

が、どれだけ頑張ってくれたか」

涙を零す、姫花。

すみれ、姫花の頬に触れて

すみれ「今日までの時間、楽しいことの方が
多かったわよ」

姫花「先輩」

姫花、ふと振り返るが少女の姿はない。

すみれ、姫花の手を握って

すみれ「今のあなたは、今日までの時間を知らないのよね」

姫花「……どんな、時間でしたか？」

すみれ「生きてて良かったって、思える時間
だったよ」

微笑み合う、姫花とすみれ。

すみれ「記憶は心の中に残ってる。あなたが
体験したことだもの。きっと思い出せるわ。

それまで私が支える。あなたがしてくれた
ように」

姫花「……大丈夫ですよ、先輩」

姫花、涙を拭いて微笑む。

姫花 「私、思い出すのは二回目ですから」

「了」